

繋がる記憶、広がる学び ～震災、コロナを越えて～

公益社団法人 地域医療振興協会  
会長兼理事長 吉新 通康

第15回へき地・地域医療学会の開催おめでとうございます。企画の北海道・東北ブロックの皆様、担当の皆様、ご苦労様です。

地域医療振興協会では、全社的な対応をした災害などの特別な経験としては、東日本大震災と新型コロナのパンデミックの二つが別格な出来事でしょう。

「まもなく指定管理で仲間になる女川病院。19メートルの大津波にのまれた、16メートル高台にある病院と老健を助ける。」

東日本大震災では、当時、東京ベイの宮崎先生が3日目に現地に入り、支援が始まりました。協会本部に対応の集約化を図り、まずは被害状況、関係情報を収集。すぐさま法人の即応体制を検討し、現地までのヘリやバスなどの交通手段、支援の名簿、物資の確保、効果的な支援計画、スケジュールの準備など、指揮命令系統と業務の担当が出来上がりました。そして、状況が落ち着く時期には、現地に様々な問題を解決する本部を設置することとなりました。医師は一部ですが3か月間、新木場から交代で6人乗りのヘリで搬送。バスも都市センターから週に数回、東京から現地へ。330人で延べ2300名の支援が行われました。院内VPNで救援や現地の情報が流れ、皆で共有しました。

新型コロナでは、各施設に発熱外来、検査・診断、濃厚接触者対策、治療。クラスター対策、行政との協議、ワクチン接種など沢山の業務が自治体から期待されました。ダイヤモンドプリンセスの患者を、協会施設が受入れ。へき地医療もそうだが、ノウハウや分析は小さな規模の自院だけでは自信がない。そばにある大学の専門医の助言で乗り切りました。

リモート会議などを活用し、先行施設や会議などの情報を共有しました。これが重要だと思う。「正しく対応しているか、何が足りていて、何が不足か。」月、水、木で医師、事務職、看護職に各施設の患者数が情報共有される。施設間のデータを共有していくうち、担当は熟練し経験値を上げて関係者はみんな専門家になっていく。「仲間でやっている。助けてもらえる。」そんな気持ちがベースにあります。まだ怖い新型コロナ。皆の力と情報を合わせて頑張りましょう。

地域医療を担当すると、経験してきた診療や能力、自分の限界が分かってきます。一方、精一杯やって、信頼されると自信になります。困ったとき応援してくれる仲間がいれば一人でもへき地医療をやっていける。そんな仲間が共同して動くと、とてつもないエネルギーになる。震災もコロナも皆で乗り切った。そんな気しません？ 今、協会は医療系大学で新たな地域医療の扉を開けようとしています。次の地域医療のステージに登れますよう、よろしくをお願いします。